

# 「いのちをいただく

関西での食肉加工場での話です。この工場では毎日多くの牛が殺され、食肉として市場に荷されます。そこに長年勤めております坂本さんという方がおられます。坂本さんはいつも牛を殺すときに牛と目が合い、「こんな仕事はいつかはやめよう」と思つておりました。

その日もいつものように牛を積んだトラックが入つてきました。しかし牛がなかなかおりてまいりません。坂本さんは不思議に思いトラックの荷台をのぞき込みますと十歳ぐらいの女の子が「みいやん、ごめんよ、ごめんよ」と牛のおなかをさすりながら泣いています。坂本さんは「見なけりやよかつた」と思いました。女の子と一緒に来たおじいさんが「この子はこの牛と一緒に生まれ一緒に育ちず一つとかわいがつておりました。しかしこの牛を売らなきや、ワシらは正月を迎えるのでな、かわいそうですがよろしくお願ひします」と頭を下げるのです。坂本さんはいよいよ「こんな仕事はもういやだ、明日は工場には来んでもおこう、とて私もにはもうこんなことは出来ん」と考えました。坂本さんは家に帰つてから小学三年生の息子にこの話をしました。明日は休むこと、女の子の泣いている姿のことなどを。子供は黙つて聞いておりましたが一緒に風呂に入つたとき坂本さんに「やつぱりお父さんがしてあげてよ、心のない人がしたら牛が苦しむから・・・」と。坂本さんはそれでも明日は休み決めておりました。翌朝学校に行く前に子供が「お父さんは必ず工場に行つてね。休まないでね約束だからね。」と言つて学校へ行きました。坂本さんは心が揺れながら渋々工場に向かいました。牛舎に入れると、牛のみいやんが角を下げて威嚇する姿勢をとります。坂本さんは「みいやんすまんなあごめんよ、みいやんがお肉にならないとみんなが困るから、ごめんよ」と頭をなでますと、みいやんは頭をこすりつけてきました。殺すときには急所を外しますと牛は苦しみます。坂本さんがじーっとしとけよ、じーっとしとけよ」と言いますとみいやんはおとなしく動かなくなりました。次の瞬間、みいやんの目から大きな涙がこぼれ落ちました。牛の涙を坂本さんは初めて見ました。【絵本「いのちをいただく」より】

私たちちは牛の肉に A3 とか A4 とか勝手に等級をつけたりヒレがおいしい、いやサーキソンだとか焼き方はレアだとミディアムだと肉を無機質なモノ扱いに見てきますが、人間の勝手以外のなものでもないのかもしれませんね。この本は絵本です。この絵本の後書きに「私たちとは奪われたいのちの意味も考えず、毎日肉を食べています。自分で直接手を汚す事もせぬ坂本さんのような悲しみも苦しみも知らず肉を食べています。いただきます、ごちそうさまも言わずにお飯を食べることは私たちには許されないです。食べ残すなんていうのはもつてのほかです・・・」と。飛行機で一時間も飛べば今日のいのちを支える食べ物のない国もあるのです。今日わたしのいのちを支えただいているのはこんな悲しみ、苦しみの世界があるのです。そのところを見えなくしたり、見えないようにするのが清潔と呼ばれる私たちの文明と言われているモノかもしれませんね。仏法の世界はこの見えないモノをみようとするものかもしれません。いのあるものをいただきながら私のいのち、生活が成り立つてることにもつと目をむけたいのですね。